

2021年5月2日（日）「突破口」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 9:4-6

- 4 確かに、すべて生きる者として選ばれていれば、誰にも希望がある。生きている犬のほうが死んだ獅子より幸せである。
- 5 生きている者は死ぬことを知っている。けれども、死者は何一つ知らず、もはや報いを受けることもない。彼らにまつわる記憶も失われる。
- 6 彼らの愛も憎しみも、妬みすらもすでに消え去っている。太陽の下で行われるすべてのうちで、彼らにはとこしえに受ける分はない。

《新改訳 2017》伝道者の書 9:4-6

- 4 しかし、人には投げり所がある。生ける者すべてのうちに数えられている者には。生きている犬は死んだ獅子にまさるのだ。
- 5 生きている者は自分が死ぬことを知っているが、死んだ者は何も知らない。彼らには、もはや何の報いもなく、まことに呼び名さえも忘れられる。
- 6 彼らの愛も憎しみも、ねたみもすでに消え失せ、日の下で行われることすべてにおいて、彼らには、もはや永遠に受ける分はない。

【序論】

「生と死」の問題を考えることは、科学を超え、とりわけ宗教の専門分野と言えらるでしょう。人間はある意味で絶えず死の問題を考えながら、あるところでは常にそこから目を背けようとしている存在と言えらるのではないか。病気、老い、身内の死などに直面したとき、死は「自分の問題」としてジワリと迫ってまいります。「俺もやがてその日を迎えるのだ」ということを改めて認識させられる。しかし、忙殺される現代にあっては、日々の慌ただしさの中で「死の問題」に向き合う時間を持ちにくいのもまた事実でしょう。私個人におきましては、体調を崩したときに、このまま家族を遺して逝ってしまったらどういうことになってしまうのかという不安に駆られることがあります。また、長距離の旅行に出る際にも、念のため身辺整理をしてから出発するようにしています。「死」というものは、私たちの人生の先で常に待機しながら、その日が薄っすらとしか見えていない時と、色濃く迫ってくる時があるようです。

本書では繰り返し「生と死の問題」が取り扱われていますが、興味深いことにコヘレトの「死生観」は箇所によって真逆になってしまうことがあるのです。例えば、4:1-2 や 7:1-2 では「死は生にまさる」ということが言われていました。ところが、今日の箇所では「生は死にまさる」とされている。「死」をどういうものと捉えるかは、置かれる文脈によって変わってくるようです。

【本論】

本論 1. 生の相対的優位性

確かに、すべて生きる者として選ばれていれば、誰にも希望がある。生きている犬のほう
が死んだ獅子より幸せである。(9:4)

本節前半はやや訳し方が難しい部分です。原文を正確に訳すと「誰にでも希望がある。すべて生ける者の間にあるなら」となります。裏返せば、コヘレトは「死んだら希望はない」と言っていることになるでしょう。つまり、ここでコヘレトは生きることに大きな価値を見出しているのです。しかし、その希望も空しいものであり、誰もがやがては「死せる者の間」に入っていくことになります。そうであるならば、ここで言われている「希望」というものは一時の光にすぎません。

後半の「生きている犬のほうが死んだ獅子より幸せである」という部分は、先に言われていた内容を更に際立たせます。コヘレトは「～よりも良い」という言い回しを好んで使いますが、ここでは「犬」と「獅子」が比較されています。現代日本人にとって、犬はペットとして家族の一員とされるほど親しみやすい動物であります(私は犬と相性が悪い)、本書が書かれた時代の犬に対するイメージは大変悪いものでした。犬は粗野で、ゴミ捨て場をうろついており、死体をもあさる動物として旧約聖書の他の箇所では描かれています。一方、獅子は百獣の王として称賛の対象とされていました。ところが、それほど価値の高い獅子も、生きていなければ犬以下であるとコヘレトは言うのです。

ここには明らかに「死」を嫌悪するコヘレトの態度があります。死を恐れ、しかしそこから逃れる道のないことに絶望する。これは「太陽の下」(神なしの世界観)という文脈に置いた結論です。

本論 2. 世界の死観

世界の死観を学ぶべく、小畑進先生の『キリスト教 慶弔学辞典』の「葬」の部分を読んでおりました (pp.205-208)。

生ける者ついに死ぬるものにあれば この世なる間は楽しくをあらなおおとものたびびと(大伴旅人)
生まれては死ぬるなりけりおしなべて 釈迦もだるま達磨も猫も杓子も(一休宗純)
露の世は露の世ながらさりながら(小林一茶)

旅人は老莊風、一休は禪家風、一茶は南無阿弥陀仏と門徒風と、三人三様ながら、“死”という壁に決定され、制圧されている人の定め奥底から、せめてもの自重の苦笑いを発しています。

目をローマに転ずると、当地の国立博物館には一枚の不気味なモザイクが展覧に供されています。半ば骸骨化した死者が、それでも、ようやく左ひじを張って、横になった体をひき起しており、意志的にグッと伸ばされた人差し指は、下面に記された一連の文字を指しています。そのギリシャ文字は、なんと「なんじ自身を知れ」というデルフォイの神話なのです。「なんじ自身を知れ」——つまり、このモザイクは、人は死すべきものと知れ、と呼びかけているのです。

今度はインドに転じて、人生を生・老・病・死の四苦で直視した釈迦は、「経集」で語ります。御覧ください。

「この世における人々の生命は定相なく、どれだけ生きられるかわからない。惨ましく、短くて、苦悩に繋がれている。生まれたものどもは死を逃れる道がない。老いに達しては死が来る。実に生命あるものどもの定めはこの通りである。若い人も壮年の人も、愚者も賢者も、すべて死に屈服してしまう。すべての者は必ず死に至る。見よ。見守っている親族がとめどなく悲嘆に暮れているのに、人は一人ずつ、屠所に引かれる牛のように連れ去られる。人々が色々と念願しても、結果は異なってあらわれる。期待にそむくこと、この通りである。世のありさまを見よ」と。

これが「法句経」になると、
「この容色は衰う、病の巢なり、敗亡に帰す、臭穢の積集は壊る、生は必ず死に終る。骨をもって城とし、肉と血とを塗り、なかに老と死と慢と覆（自分の罪をかくす）とを蔵す」と、いよいよ悲痛、無惨です。

このように、洋の東西を問わず、識者たちは、人間＝死すべきもの、と語ってあきないのですが、これも人間が“死”という厳粛な事実をわきまえずに、せいぜい他人事のように思い込んでふるまっているからです。

本論 3. 種々の喪失（意識、報い、人々の記憶からの、感情、分け前）

コヘレトの言葉の全体から見て、彼が「死」を嫌悪する理由は、すべてが無に帰するためと言えます。地上で築き上げた富も人間関係も、残るものは何もない。地上の生涯を絶対視するならば、そのような結論に陥らざるをえないでしょう。5～6節では、死によって失われるものが5つほど挙げられています。

①意識

生きている者は死ぬことを知っている。けれども、死者は何一つ知らず (9:5a)

生きていれば自分の存在と行動を意識し、生と死の両面について考えることができますが、死んでしまえばそれすらできなくなってしまう。死んでからでは死に備えることはできず、現在における生き方を変えていくこともできない。

②報い

もはや報いを受けることもない。(9:5b)

生きていれば、人生の喜びとか、労働への対価といったものを受け取ることができる。しかし、死んでしまえばもはやそういう喜びを受けることはできない。

③人々の記憶から

彼らにまつわる記憶も失われる。(9:5c)

生前に築いた良い人間関係や思い出があったとしても、「去る者は日々に疎し」であり、だんだんと人々の記憶から忘れられていってしまう。

④感情

彼らの愛も憎しみも、妬みすらもすでに消え去っている。(9:6a)

ここでは「愛」「憎しみ」「妬み」という三つの感情が取り上げられています。これらは人と人との関係における愛情と、その裏側に常に息を潜める真逆の思いを表しているでしょう。愛と憎しみは激しいもので、生きる力そのものにもなれば、死に至らせることもある。しかし、死んでしまえば、良いことも悪いことももはや味わい知ることにはできない。辛くても生きていることは幸いだと言っているのです。

⑤分け前

太陽の下で行われるすべてのうちで、彼らにはとこしえに受ける分はない。(9:6b)

「受ける分」とは、財産や不動産のことを言い表しているでしょう。地上で得た諸々のものとは一体何だったのか。何も墓に持っていくことはできないではないか。

以上のように、コヘレトは死によって失われていくものを一つひとつ数え上げ、再びため息をつきます。永遠という世界がないのであれば、地上の営みが永遠と何の関わりも持っていないのであれば、「太陽の下」の人生はそのような結末とならざるを得ないでしょう。

【結論】

本書からの説教で何度も繰り返している結論ではありますが、コヘレトは「神なしの人生」の限界を追求することにより、そこに突破口を見出そうとしているのです。その人生は実は死で終わりではないということを、彼は「隠れた前提」として念頭に置いています。新約聖書の光に照らして見るならば、これらの問いのすべてに答えが与えられます。新天新地においては、地上において築き上げられた神との交わりは永遠に残るものとなるでしょう。地上における労苦や悲しみの意味を知り、一つひとつに正当な報いが与えられます。壊れた人間関係は修復され、憎しみは愛と赦しで塗り替えられるはずです。地上で神にささげられた富は、永遠の世界に持ち越され、何十倍、何百倍にも増やされると思われれます。主イエスを信じて神の子とされた者は、永遠の神の国をキリストと共に治めると約束されているのです（黙示録 21:5）。

最後に、先ほどの小畑先生の文章の結論部分を引用して終わります（pp.214-215）。

メモント・モリ

それに、人は生きながら死につつあるということは、あのアダムが禁断の木の実を食べた時に、ただちに頓死せず、死に始めたことに十分物語られているところです（創世 2:17、3:6）。ただし、先に参照した『平家物語』や『存在と時間』が言う、死ばかりは身代わりができないという点については、たしかに人は、ただおのれの死を死んで行くのであり、人と人との間では死を身代わりはできず、人はおのれの死を死んで行くとしても一人の人（アダム）が死んだために、すべての人が死に、一人のお方（イエス・キリスト）が身代わりに死なれたために、すべての人が生きるという秘密を聖書は明かすのであり、それあるがゆえに、様相は一変して行くのです（Ⅱコリント 5:14-15）。それはあとで論ずることにしましょう。

ともかくも、聖書は人の生命のはかなさ、あわれさ、やりきれなさを十分に視野におさめており、人は死すべきものであること、いやすでに死につつあることを銘記せよ“メモント・モリ”（死を忘るな）の声をあげていることを確かめておきましょう。

このことを前提としつつ、私たちはキリストにあって「死んでも生きる」者とされていることを信じているのです。

【祈り】

人生の主なる神よ。私たち人間はやがて死ぬべき存在として生まれてきます。その日から目を逸らして生きていますが、刻一刻と時は流れ、生は死によって飲み込まれてしまいます。コヘレトもその事実を目の前に突きつけられ、「死の意味」を考え抜いた人の一人でした。私たちも自分の死を見据えることにより、自分の人生の主権があなたにあることを認めることができます。そして、イエス・キリストの福音は、人は死でもって終わるものではないことを教えてくれています。私たちはイエスを主とし、永遠のいのちの約束に立って歩んでまいります。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人の人生に初めと終わりとを定め給うた、父なる神の愛、
限りある一生の中で、神を見出させ給う、主イエス・キリストの恵み、
第二のアダム之死により、第一のアダムにいのちを与え給うた、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。